

# 大正大学の有坂秀世講師

## 要旨

有坂秀世氏は、生涯を通じてただ一度だけ大正大学の教壇に立ったとされているが、その詳細は明らかでなかった。

筆者は、大正大学に残されている記録類、当時の関係者の記憶、記録等から、これを少しでも明らかにしたいと考えた。

幸いにして、有坂講師自筆の「授業経過報告」、「三學會」誌所載の原稿「劣敗者の人生観」、受齋生字井浩道氏筆録の「国語學史」ノート等を発見することができ、今後、大正大学時代の有坂氏の研究、教育活動の全体像を明らかにすることが可能になったと思われる。ここにその第一歩としてささやかな報告を試み、諸賢のご叱正を得たい。

有坂秀世氏は、生涯を通じてただ一年だけ教壇に立ったとされている。金田一京助氏の追悼文「有坂博士の想い出」(『国語学』第十輯、昭和二十七年九月)には「十四年には大正大学の国語学史の講義をもっていた(頁八五)」とあるが、『上代音韻攷』(三省

堂、昭和三十年七月)の序文「序にかえて」では、「昭和の十二年ごろは、大正大学へお願いして国語学史の時間を持っていた(き)となり、金田一春彦氏の『日本語音韻の研究』(東京堂、昭和四十二年三月)では、「昭和16年」(pp.四九六、五〇二、五〇五)となっている。まずこの年代を確定しておきたい。結論からいえば、有坂氏は、昭和十四年四月十日付で大正大学の専任講師を嘱託され、文学部の「国語学史概説」、専門部高等師範科三年の「国語学史」(両者は同一のもの)を火曜日の第5・6時(1時~3時)に担当した。『上代音韻攷』所収の「有坂秀世博士略年譜」は、「有坂博士追悼録」(『国語学』第十輯所収)中の「有坂秀世博士略年譜」に従って「昭和十四年四月」と正しい記録を示している。発令に先立つ同年四月八日の総務会(注2)で有坂氏の講師採用が確定した。なお、総務会の議事録には「猶有坂氏採用ニツキテ金田一氏ヨリ服部氏ヲ休マシメテ言語学ヲモ有坂氏ニ担当セシメタシト申出ハ拒否シ從來通り言語学ハ有坂氏(「服部氏」とあるべきところ——筆者)トス」とある。この間の詳しい事情はわからないが、少くとも二つの推測をすることが可能である。一つは、金田一京助教授が愛弟子に奉職、教育の場を与えようとしたことである。そして、もう一つは、

週ニコマの講義に有坂氏の健康状態がたえうる、と金田一教授が判断したことである。私は、特に後者に関心をもつ。昭和十年十月ごろに鎌倉の鈴木療養所を退院した有坂氏の健康は、徐々に恢復していたと思われる。昭和九年九月十一日付で大正大学の兼任講師を嘱託され、以来「国語学史」を担当していた東條操氏が昭和十二年度末に退任した。文学科の「国文学国語学ヲ専攻スル者」にとつて、国語学史一単位（通年二時間）が必要であった（大正十五年四月五日認可の「大正大学学則」第七条。大正大学五十年史編纂委員会編『大正大学五十年略史』p.三三六。昭和五十一年十一月）。昭和十三年度に「国語学史」は開講されなかったが、至急再開される必要があった。そこで、昭和十四年度に有坂氏が「国語学史」（題目は「国語学史概説」）を担当することになったのである。しかし、なぜ昭和十三年度からではなかったのか、この点、私には疑問のままである。昭和十二年には多数の論文が発表されているし、学会への出席もみられる。特に昭和十二年三月二十四日、東大山上会議所でおこなわれた日本音声学協会の第39回研究会での講演、「唐音の研究法について」は、二時間にも及ぶ熱演であった（『音声学協会会報』第46号、p.16の「第39回研究会報告」。昭和十二年三月）。

総務会の決定を知らせた金田一教授への返信にはつぎのようにある。

拜啓 御手紙ありがたく拜讀致しました、又大正大学よりの印刷物類をもわざわざ御轉送下さいましてまことに恐れ入ります、御厚意何とも御禮の申し上げやうがございません、講義は何分未だ慣れない仕事でございますから、今年は一課目だけに充分に力を注ぐことの出来ます方が、私にとつては却つて適當

であるやうにも存せられます、この方面につきましても何とぞ今後御指導を御願ひ申し上げます。……………（略）……………

四月十一日 有坂秀世

金田一先生

さて、大正大学の昭和十四年度学曆によれば、第一学期は四月十日（月）始業式、四月十一日（火）授業開始、六月卅日（金）に授業終了、七月二日（日）から同七日（金）までが試験期間である。有坂講師の授業は、前掲の手紙から判断して、おそらく四月十八日に開講された。四月二十五日は靖國神社臨時大祭黙禱式で授業はなかったと思われるから、四月十八日から六月二十七日まで十週分の授業ができることになっていた。この間、何週分の授業を消化したかについては、昭和拾四年六月卅日付の「大正大学授業経過報告（昭和十四年度第1学期）」が残されていて、「総授業時数 十八時間」すなわち九週分が消化されたことを知る。有坂講師は、開講してから一回しか休講しなかったのである。「授業経過報告」（以下、「報告」と略す。）は、担当者が過去一学期間の授業内容をまとめたもので、参考のため全文を後に掲げた。一般に項目を箇条書きにして示す「報告」が多い中に、有坂講師の「報告」は、一段と詳細である。確かに新任だったからでもあろうが、「講義者不慎レノ爲メ、説明稍詳細ニ過ギテ、講義ノ進捗意ノ如クナラザリシコトヲ遺憾トス、本學期遅レタル所ハ來學期ニ於テ之ヲ補ハシコトヲ期ス」という態度は、いかに有坂氏らしい。講義内容は「報告」に概略示されているが、なお幸いなことに、当時専門部高等師範科三年生で講筵に列した宇井浩道氏のもとに「國語学史」ノートが保存されてい

る。「報告」に「教科書ヲ用キズ、スペテ講義ヲ筆記セシメ、之ニ就キテ詳細ニ説明ヲ加フ」とあるように、有坂講師は、小声で早口ではあるが、講義を筆記させた。宇井氏は、一回の欠席もなく、講義をほぼ完全に筆録したという自信をもっている。われわれは、今後、有坂講師自筆の「報告」と宇井氏筆録のこのノートによって、試験問題だけがわかつている。「あめつちの歌の國語學史上に於ける地位を論ぜよ。」であった。

第二学期は、九月十一日(月)授業開始、十二月十六日(土)授業終了、試験期間が十二月十八日(月)から同二十三日(土)までであった。十月十七日(火)は神嘗祭、十一月七日(火)は体育デーで授業はなかったと思われるから、この二回を除き、有坂講師の授業は十二回予定されていた。ところが、二学期の「報告」によれば、六週十二時間を消化したのみである。ここで、「有坂秀世博士著作論文目録」(『上代音韻攷』所収)をみてみると、大正大学の講義担当期間中は、著述が相当に少くなっていることに気づく。「韻經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態」(『言語研究』第二号、昭和十四年四月)は力作であるが、それ以前の作であろう。「萬葉集に於ける漸々の訓その他」(『国文視野』第六輯、昭和十四年十二月)は、大正大学国文学会の機関誌に載ったものであるから、まさしく大正大学時代の作である。「先秦音の研究と拗音的要素の問題」(『音声学会会報』第60・61号、昭和十五年三月)も、この時期のものと考えられる。このほかに、あるいは「カールグレン氏の拗音説を評す(四)」(『音声学会会報』第58号、昭和十四年七月)ほか一、二篇が加わるとしても、有坂氏としては少いといえる。昭和十三年度

も少いのであるが、<sup>注11</sup>少くとも昭和十五、十六年度に比して、相当に少いのである。有坂講師は、大正大学の講義に心血を注いだ。昭和十四年の秋に書きあげられたと思われる「劣敗者の人生観」という文章の原稿(四百字詰九枚)が、宇井浩道氏のもとに保存されている。当時、大正大学高等師範科では、機関誌『三學會』(仏教学、国文学、漢文学の三学会)を出していた。「劣敗者の人生観」は、三学会幹事であった宇井氏が教室で執筆を依頼し、昭和十五年一月一日発行の『三學會』第十三号に掲載されたはずのものである。<sup>注12</sup>

「劣敗者の人生観」は、新井白石と本居宣長とに対し、「燃えるやうな研究心、求道心」によって、質量兼備した大事業を完成したと賞讃している。白石と宣長とに対する敬意は、何もこのときに限ったものではないかもしれない。しかし、有坂講師の講義内容から、このころ、江戸時代の国学者の著作を詳細に検討していたことが察せられ、このこととあわせ考えて、はじめて白石や宣長への賞讃がよりよく理解されるのである。そして、このころ、江戸時代の国学者に対する直接の研究、著述がみられないからには、有坂氏の「燃えるやうな研究心、求道心」の対象となった国学者の学説追求のしてとは、もっぱら大正大学の講義のためであったといつてよいであろう。二学期の授業は、十二週分中、六週を消化したのみで、二回に一回は休講だったという計算になる。しかし、そのことは、単に健康がすぐれず休講が多かった、という程度に解すべきではない。講義に全力を<sup>注13</sup>尽し、その準備に集中するあまり、健康を害したと考へべきである。嗜血したその日にも机に向かった有坂氏である。<sup>注14</sup>

第三学期は、一月十一日(木)から二月二十八日(水)までが授業期間、三月一日(金)から同七日(木)までが試験期間であつ

た。有坂講師は、七週分中、五週を消化、終りの二週を病気で休んだ。三学期の「報告」は、「なほ、宣長以後のてにをは研究について述べ、用言の活用、文典の編纂、語原の研究、辭書の發達等について説明する豫定なりしも、病氣のため最終二回の講義を中止するの已む無きに至り、つひに講義を完結する能はざりしことは、深く遺憾とする所なり。」と結はれている。二学期には休講が多くて、講義の進捗、意の如くならなかつた。三学期にはまとまりをもって終らねばならない。予定に従い、相当のスピードで講義は進められた。筆録されたノートの量は、一学期に匹敵する。講義完結にかけた有坂講師の意気ごみが察せられる。はからずも病氣になって、さぞや心残りであつたことだろう。

ここで、金田一京助氏の前掲「有坂博士の想い出」によって有名な、「ある寒い、みぞれの降る日」のことを検討してみたい。「一年ほどつづいて、間もなくある寒い、みぞれの降る日であつた。大正大学からの帰りの電車が、こんで容易に乗れず、おら下るようになり、帰られたのがわるく、肋膜炎を起こされて休まれるようになり、十六年からは、終に病床の人となられた。」(pp.八五—八六)このことについて、金田一春彦氏の記述はもっと詳細である。「博士はこれあと16年に大正大学の講師になられたが、あるみぞれの日に、こんだ山の手線の電車に乗って風邪をひかれたのがもとで結核を再発し、ずっと床につかれて、2度と再起ならなかつたのだ。」(前掲『日本語音韻の研究』p.五〇二)「16年の年のくれ、みぞれの降る寒い日だつたそうだ。博士が講義を終えて巢鴨のプラットホームで山の手線を待っていたが、その日はどういふものか電車がものすごくこんでいた。来る電車も来る電車も満員のままフォームへ多くの人

たちを残して発車してゆく。……(略)……。フォームに立ちつくすこと、小1時間、おそらく後の人に突き飛ばされてやっど何合目かのに乗つたが、車の中に進むことができず、ドアのあいたままの車体に、片足はステップの上におろしたままの姿勢で新宿まで運ばれた博士は、半身に冷い雪まじりの雨をあびられた。そうしてそれがもとで、肺をおかされ、ふたたび病床につく身となられたのだ。」(同上、pp.五〇五—五〇六)「16年」の点はともかく、まず「年のくれ」であつたかどうか検討してみよう。十二月における有坂講師の授業日は、五日、十二日の二回である。「年のくれ」というには、まだ早い。十九日は二学期の期末試験の日である。年のくれには近いが、十九日ならば、「試験の日」という説明がついたであろう。確かに二学期には休講が多かつた。しかしながら、三学期に講義を完結させたいという有坂講師の意気ごみで、講義の進捗度が急ピッチだつたことは、すでにのべた。宇井浩道氏も、三学期の有坂講師からみて、十四年十二月に肋膜炎や肺結核の再発などがあつたとは思えないという。

#### 昭和十四年十二月二十六日の「東京朝日新聞」(朝刊)は、つきのように報じている。

恥しきうな初雪  
廿六日午前零時過初雪といふのも恥かしい位の白いものがチラチラ帝都を見舞つたがそれもほんの一時、間もなく小雨に變つてしまつた。……(略)……

昭和十四年の初雪は、十二月二十六日であつた。しかしながら、みぞれあるいはほんのわずかな雪まじりの天候であれば、それ以前にもあつたかもしれない。念のため、当時の記録を検してみると、十二

月五日は晴、十二日は朝がた煙霧がたちこめたが、雨は降らなかつた。十九日は、異常透明の快晴である。そこで、まず十四年十二月は除外してよいことになる。<sup>注16</sup>

ところで、三学期の「報告」には「病氣のため最終二回の講義を中止するの已む無きに至り」と記されている。有坂講師の最終授業は、昭和十五年二月十三日だったことになる。私は、「ある寒い、みぞれの降る日」をこの二月十三日のことと推測する。ところが、二月中ごろのこととしては、とりたてていうほどの天候ではなかったのだからか。二月十四日付の「東京朝日新聞」夕刊（二月十三日発行）には、天候自体についての記事がみえない。「あゝ歴戦の赭顔を 水雨に叩かれて 郷土部隊續々と歸還」のようなみだしはあるが、いま一つ裏づけに欠ける感がある。『中央気象台月報』一九四〇年二月の「記事」（リール番号N100三七六三）によれば、二月十三日には0時すぎに降りはじめた雨が21時すぎまでつづき、23時にまた降り出して翌日に至っている。しかし、雪やみぞれの記録はない。当時、中央気象台は竹平町（現在の大手町）にあった。共立女子大学教授の神山恵三氏によれば、竹平町が雨であっても、巢鴨あたりでみぞれが降る可能性がないわけではないという。昭和十五年一月十六日（火）から二月六日（火）までの有坂講師の授業日に、該当する天候の記録はなく、少くとも授業日であるとするならば、二月十三日が最も可能性のあることになる。

ここで、出発点に立ち返ってみよう。「一年ほどつづいて、間もなくある寒い、みぞれの降る日であった。大正大学からの帰りの電車が、こんで容易に乗れず、ぶら下るようになりして帰られたのがわるく、肋膜炎を起こされて休まれるようになり、十六年からは、終に

病。床。の。人。と。な。ら。れ。た。」（圈点は筆者。「十六年云云」は後述。）この文章が書かれたのは十余年後のことではあるが、そのとき、金田一京助氏の記憶は確かであった。

二月十三日のできごとで著しく健康を害し、再起不能になった、とは私は考えない。昭和十五年度には昭和十四年度よりも多くの論文が発表され、昭和十五年十二月には『音韻論』が刊行されている。『音韻論』は、既発表の論文、たとえば『コトバ』に掲載された「音韻變化について(一)」「(二)」(昭和十年十一月〜同十一年五月)などをもとにして書かれてはいる。しかし、おそらくは書下しに近い労力が払われているのではないかと思われる。『音韻論』が、『上代音韻攷』の關係部分および既発表の論文を通じて、どのように形成されていったか、この課題を私はまだ追跡するに至っていないけれども、拙稿「前史——石塚眞磨から有坂秀世まで——」(『中国語学』第二二八号、昭和五十六年十一月)の注21(pp.九六―九七)<sup>本巻三八四―三八五</sup>において、『上代音韻攷』から「音韻變化について(一)」を経て『音韻論』に至るふくらみを、一つの例で追ってみたことがある。

病氣は、軽くはなかったであろう。決定的に病に倒れたのではなかったが、この学年末、大正大学の講師を辞任しようと思案させるには十分だった。<sup>注17</sup>講義が健康上相当の負担であったことは、まずまぢがいない。<sup>注18</sup>有坂講師は昭和十五年三月をもって辞職した。少くとも本人はそう思っていたが、大正大学は同年四月二日の評議員会において「一往整理解囑スベキ講師ノ件」を議し、有坂講師を解囑ではなく、十五年度休講のあつかいとす。そして、四月一日付で学部講師、専門部高等師範科講師の辞令を交付している。さらに、昭和十五年六月十七日付の、大正大学長加藤精神より文部省専門学務

局長あての「教員ニ関スル調査事項報告ノ件」という書類で、有坂秀世ユキキを休講の専任講師として名簿に載せている。この措置は、いつでも復帰できるようにという金田一教授の温情にもよるのであるが、右の名簿をみると、専任教員四十一名、兼任教員十五名のほかに、休講の専任教員十二名、同兼任教員十五名の名があつて、有坂講師に限つての特例ではない。大正大学は、さらに昭和十六年度、昭和十七年度にも、有坂講師注10（休職）を文部省へ提出の教員名簿に載せている。

週一回、二時間の講義担当にたえられない身ではあつたけれども、有坂氏は、まだ研究論文を発表することはできた。昭和十五年（昭和十五年四月〜昭和十六年三月）の期間に十篇ほどの論文を書いた。十五年十二月には『音韻論』も出てゐる。『音韻論』がこの時期にすべて書きあげられたわけではないが、やはり、直前の労力を要したのではあるまいか。もはや教育の場に復帰しえない身と痛感して、一層執筆に努めた結果、『音韻論』を完成したとも考えられる。常人には週一回の講義の方がはるかに容易であつて、仮に質を問わずとも、これだけの論文、著書の執筆はきわめて難事である。ところが、著述をすることは、有坂氏にとっては、比較的負担が軽かつた。『上代音韻放』のある部分が入院中に書かれたことは、よく知られている事実である。もっと具体的な事実をあげてみよう。金田一京助氏が「有坂秀世氏音韻論手簡」と名づけた、「金田一京助先生」あての二月十五日付書簡がある。これは、「音韻に關する卑見」『音聲学協会会報』第35号、昭和十年一月）に対する金田一氏の質問に答えたもので、そのごく一部分が「音韻に關する卑見」中の用語の訂正（同上、第36号、昭和十年五月）に記され

ているが、もとの「手簡」は、九十二枚にのぼる大部なものであり、整然と書かれていて、清書そのことにさえ多大の労力が払われたことを示している。

「拜啓 久しく御無音にのみ打過ぎまして、まことに申しわけございません、先生には御變りもいらせられませんか、私は御蔭を以て大變宜しくなりました、最近では一日二回二十分づゝの散歩をさへ許されるやうになりました、憚り乍ら御安心下さいませ、さて、先日は、音聲學協會會報に掲載していただきました拙稿につき、わざわざ御手紙を賜はり、まことに難有うございました。早速御返事を差し上げます筈の處、御承知の通りの身體でございますから、心のみあせりまして容易に抄らず、つい〳〵今日まで延引いたしましたことは、何とぞ御寛恕下さいませ……………（略）……………」

「一日二回二十分づゝの散歩をさへ許されるやうになりました」とあるが、普通のいい方では「一日二回二十分づゝの散歩しか許されない」患者が、形式的にいつても九十二枚の長文の手紙、内容的には堂々たる大論文（四百字詰原稿用紙六十枚程度に相当か）をわずか一ヶ月ほどの間に書いていたのである。昭和十五年度になると、研究を進め、それを発表することしか有坂氏には残されていなかった。あるいは、研究を進め、それを発表することがまだ残されていた、といつてよいかもしれない。学位記の受領を報告した、（昭和十八年）五月二十日付の「金田一京助先生」あての手紙では、「……………、なほ、昨年末、澁谷の明世堂主人が三回程來訪致し、私の既に發表致しました雜誌論文を纏めて出版させてもらひたいと懇望致しましたので、『國語音韻史の研究』といふ名で、一部分の出版に承諾を與へておきました、以

前に先生から御話がございました際には、身體の丈夫な頃で、唯先へ先へと進んで行きたく思ひ、缺陷だらけの過去の仕事の再發表などは、更に思ひもよらぬ事と存じて居りましたが、今回は、既に全く空白の一年半を過し、將來もなほ當分は生産能力を回復し得まいと思つて居りました時に、話が出ましたので、やらせて見ようかと思ふ氣持が動いた次第でございます、……とあつて、さすが日進月歩の有坂氏も、「生産能力」なく、立ちどまらざるをえない時がやってくる。

以上のごとく、「ある寒い、みぞれの降る日」は、研究者か研究者兼教育者かの択一の分岐点となつた。そのほかに、もう一つの意味を考えてみたい。しばし推測に終始することをお許しいただきたい。昭和十五年二月十二日、帝國学士院は第三十回恩賜賞、学士院賞の授賞者を決定した。十三日朝、有坂氏はその新聞發表をみて家を出た。『兵器考』<sup>注22</sup>によつて学士院賞を授与される有坂鉦藏<sup>注23</sup>は父である。大きな目標であつた父は、また一歩遠く離れたようであつた。放心したように有坂氏は、この一つのことだけを考へていた。しばしばそうであつたように、集中のあまり、ほかのことは念頭になかつた。氷雨にぬれるのも氣づかなかつたのである。新しい目標に向かつて決意を新たにしたら、この日の強烈な印象を、後になつて、彼はただ叙景的に語つたにすぎない。もう一つの意味は、有坂氏の理解に父との關係という視点を導入する。

生命を削るような日々がはじまつた。そして、昭和十六年七月八日、東大文学部へ出かけて、みづから学位請求論文『音韻論』を提出していくばくもなく、遂に病に倒れて三たび入院することになる。<sup>注24</sup>

〔附記〕

小稿は、昭和五十七年四月十七日(土)、第一七六回都立大学方言学会において發表した「大正大学の有坂秀世講師」の一部分に加筆したものである。本稿を草するにあたっては、じつにたくさんの方々より恩恵を受けた。

令兄有坂愛彦先生ご夫妻、服部四郎先生には全般にわたつていろいろご教示を賜わつた。中国語学会理事長(当時)波多野太郎先生には大正大学へご紹介の勞をとつていただいた。大正大学の牧尾良海学長、企画広報室の田中祥雄課長および企画広報室の皆様には特別のご配慮を賜わつた。特に田中課長の積極的なご支援がなければ、本稿は形をなすに至らなかつたであろう。常光寺の宇井浩道師が四十余年前の貴重な講義録と有坂講師の原稿とを今日に伝えて下さつた功績は、筆舌につくしがたいものである。金田一春彦先生には、ご架蔵の有坂氏書簡集の数々を使用させていただいた。氣象關係のことについては、共立女子大学の神山三教授、氣象庁観測部統計課の土田武雄補佐官および佐藤永壽資料係長にお世話になり、有益なご教示をいただいた。また、早稲田大学文学部三年生(当時)の萩原久美子さんには調査を手伝っていただいた。大島一郎先生には、折にふれて適切なご指示を賜わつた。

上記の方々に衷心よりお礼を申しあげる。

注1 その後、昭和十四年七月六日付、大正大学長大森亮順より文部省専門事務局長あての「教員ニ関スル調査事項報告ノ件」なる書類中の教員名簿に國語学担当の専任講師「有坂秀世」の名がみえる。また、昭和十四年十一月九日付で、大正大学設立者、仏教々育財團理事長里見達雄より文部大臣河原田稼吉あて「大正大学々部教員認可申請ニ関スル件」として、「今般左記ノ者ヲ大正大学々部教員ニ採用シ頭書ノ学科目ヲ担当致サセタク

候条御認可相成度此段申請候也」と願いが出されている。「頭書ノ学科目」とは、「国語学史」である。この教員許可願には履歴書、戸籍抄本、世田谷区長による身分証明書等が添えられている。これに対して、昭和十四年十二月九日付で文部大臣河原田稼吉より大正大学あてに「左記ノ者学部及予科(各)頭書学科目教員ニ採用スルノ件認可ス」と許可が出た。これで正式に大正大学の有坂秀世講師が誕生したのである。ついでながら、このほか、注意すべきものとしては、昭和十四年十二月二十日付で教学局長官より大正大学長にあてた「参考ニ供シタキニ付賞学(校)ノ教職員中左記ノ要綱ニ該当セル者ハ本月二十八日迄に御報告相成度……」という「発企三三三号」の書類がある。「記」は、「日本歴史(日本文化史、其ノ他ヲ含ム)及国語(国文学史等ヲモ含ム)ノ講義ヲ担任セル教職員ノ氏名及ソノ著書、パンフレット並発表論文……」となっている。これに対して昭和十四年十二月廿七日付で大正大学長大森亮順より教学局長官あての回報があり、そこには「国語担任者」として有坂秀世の論文目録があがっている。目録中の「『うちやめこせね』に就いて 昭和一一、六 解釈と鑑賞」は短いものではあるが、「有坂秀世博士著作論文目録」(『上代音韻攷』所収)に補充すべきものである。なお、翌十五年九月にも「国語国文学」の講義担任者に対する照会があるが、有坂秀世分の回報はきわめて簡略になっている。

注2 総務会のほかに評議員会、主任会等があったが、総務会が最高の議決、執行機関だったようである。

注3 俸給は、昭和十一年度以降、言語学を担当していた服部四郎専任講師と同額で、月二十四円であった。同時に図書館書記に採用された者の俸給月額四十五円と比較すれば、実質上は今日の非常勤講師に近い身として、決して少いとはいえないと思

う。

注4 療養生活の詳細については、別の機会にゆずる。簡単には『都立大学方言学会会報』第99号所載の拙稿「大正大学の有坂秀世講師」を参照されたい。

注5 正確にいえば、東條講師の解職は昭和十五年四月二日の評議員会で決定され、昭和十五年三月卅一日付で退職したことになる。

注6 学則にみえる科目名は「国語学史」であり、東條講師の題目はそのまま「国語学史」であった。有坂講師が「国語学史概説」という題目を提出したのは、そのひかえめな態度を示すものと考えてよいであろう。高等師範科のことまでは念頭になかったので、「概説」の語を加える注文はなかった、と考えたい。

注7 「有坂博士の想い出」には「大学を卒業して、大学院に入って勉強されているうちに、一度、高等学校時代にかかられた胸の病が再発して、片瀬の療養所に六年闘病の生活をつづけられてとうとう胸の病を克服された精神力、しかも、この闘病生活の中から、諸雑誌へ寄せて来られる相次ぐ論文が、一篇ごとに、われわれを驚倒する独創の新説だったのである。健康を回復されたのは昭和十三年頃だったろう。十四年には大正大学の国語学史の講義をもっていただいたり、……」(P.八五)とある。十数年たってからの記述であるから、当時もそうであったとはいえないが、金田一氏の記憶では、昭和七年に「片瀬の療養所」に入院、六年の後、回復したということになっているようである。

注8 『トトバ』第七巻第四号(昭十二、四)に「古音推定の資料としての音相通例の價値」が発表されているが、同号の「編集後記」に「有坂氏の論文は、氏が三月の音声学協会の例会で唐音の研究を発表されましたやうに、目下古音の實際研究に當つて



るられる体験からの貴重な所産です。」(p.七九)とあることなど参照。有坂氏のはじめての講演ということで話題になつてい  
たとと思われる。

注9 文学部の学生は、学年末に一度のレポート提出でよかつたら  
しい。高等師範科には筆記試験があつた。昭和二年の文部省令  
第一号第三条により、高等師範科の学年末(または学期末)試  
験の日程、教室、監督等は、報告せねばならなかつた。昭和十  
五年一月三十日付で大正大学長大森亮順より文部大臣松浦鎮次  
郎あてに報告が提出されている。すこし後には試験問題まで報  
告され、服部麟師の試験問題も記されている。しかし、この年  
度には試験問題は含まれていない。

注10 昭和十五年三月、大正大学専門部高等師範科国漢科卒業。昭  
和十七年九月、大正大学文学部国文科卒業。元小山市教育委  
員、同教育委員長。現在、常光寺住職、浄土宗会計監査員。栃  
木県小山市在住。

注11 唐音の研究にとりくみはじめたことも関係していよう。一種  
の準備期間であつた。なお、注20を参照。

注12 『三學會』は、大正大学にもほとんど残つておらず、発行年  
月日、号数は、未確認のままである。

注13 「何事にも全く無経験な私です。學識の淺薄は固よりのこと  
ですが、人を教へるのは今度が始めてで、先生と呼ばれる度に  
びつくりしてばかり居ます。実際の道も辨へませんから、皆様  
にはいつも失禮して居ます。私のやうな者の講義を、學生諸君  
が兎も角も聴いて下さるのが何よりも嬉しく、この上は全力を  
盡して本務の遂行に力めたいと思ひます。人を教へることによ  
つて自らも教へられ、學問の上にも修養の上にも得る所が甚だ  
多いといふことを、此の度の體驗によつて始めて知りました。  
何とぞ諸先生の御指導御鞭撻を賜はりたく存じます。」(『萬葉

集に於ける漸々の訓その他」p.四)なお、「萬葉集に於ける漸  
々の訓その他」は、書き改められて「萬葉集訓義雜考」(『国語  
研究』第九卷第一号、昭十六、一、仙合)となり、その一部分  
が『國語音韻史の研究』(明世堂、昭十九、七)に「やうや  
う」の原形について」として収録された。『國語音韻史の研究  
増補』(三省堂、昭三十二、十)では、「萬葉集訓義雜考」の他の  
部分も収録された。しかし、ここに引用した冒頭の部分は、い  
ずれのばあいにも削られてゐる。「修養の上にも得る所が甚だ  
多い」という表現は、まことに興味深い。

注14 昭和十七年九月二十六日付の「金田一京助先生」あての手紙  
には「……、私は七月初には至つて鬮子が宜しうございました  
處、時候のせいが、同十七日に少量(約五十グラム)の咯血を  
致しまして、その爲、唯今では唯食事の時だけ床の上に起き上  
るやうになつて居ります、……」とあるが、その七月十七日に  
『北の人』受領の礼状を書いている。手紙を書く以上のこと  
をしたかどうかはわからない。また、手紙を書いたのが咯血の前  
であるか、後であるかもわからない。しかし、いずれにしろ、  
鬮子はよくなかつたはずである。これだけのことで、常人に  
まねのできないことである。

注15 気象庁所蔵の手書きの記録『中央気象台月報』の一九三九年  
十二月の「記事」(マイクロ・フィルム、リール番号N-100三  
六六三)による。

注16 『中央気象台月報』の一九三九年十一月の「記事」(リール番  
号N-100三六六三)によつて、十一月の七日、十四日、二十  
一日、二十八日の天候も除外される。

注17 仮にこのことが十二月のことであつたとしたなら、新学期の  
スタートまでにすこし間があり、あるいは別の展開がみられた  
かもしれない。私が「ある寒い、みぞれの降る日」に執拗にこ

だわる理由は、一つにはここにある。

注18 四兄有坂愛彦氏談。

注19 「国語学史」は必修であるのに、どうしてこのような措置をとりにつづけることができたのか。宇井浩道氏は、文学部在学中、金田一教授の「国語学概論」を重ねて修得し、これを「国語学史」に充当した。便法が存したのである。

注20 『國文視野』第七輯（昭和十六、七）所載の「先生御近況」には「お寒くなりましたが皆様御變りはいらせられませんか。私は御蔭を以て元氣で暮して居ります。數年來手にかけて居りました著書がやうやく出来上りましたので一息つきまして、今後當分の間は雜誌論文などで時々卑見を發表しながらだん／＼と次の研究を纏めて行きたいと存じて居ります。何とぞ御指導御鞭撻下さいますやう御願ひ致します。皆様の御健闘を御祈り申し上げます。」（p.二六）とある。

注21 『上代音韻攷』は、昭和七、八年ごろに書かれたとされている。「有坂秀世博士略年譜」『上代音韻攷』によれば、すっかり入院期間中だということになるが、じっさいにはその時期ずっと入院していたわけではない。なお、注4参照。

注22 『兵器考古代篇』（雄山閣、昭和十一年十月）、『兵器考證篇（一般部）』（同、十一年十一月）、『兵器考證篇（海軍砲兵小銃）』（同、十一年十二月）、『兵器考證代篇』（同、十二年一月）。著述の意図については、昭和十五年二月十九日の「帝國大学新聞」に載った本人の談話参照。評価については、『日本学士院八十年史資料編四』（日本学士院刊、昭和三十八年一月）pp.四五—四五六。

注23 当時、東京帝國大学名誉教授、工学博士、海軍造兵中將（退役）、帝國酸業株式会社社長。人類学会評議員、軍事史学会理事長。少年のころ、フェノロサ、エドワード・モースの家に遊び、明治十七年三月二日、東京大学予備門生徒のとき（十六

才）、向ヶ岡貝塚で弥生式土器を発見。明治三十年、海軍國産砲の嚆矢、兵第一号十二センチ速射砲を創製。早熟の天才で、かつ晩成の勉勵家でもあった。

注24 「有坂秀世博士略年譜」『上代音韻攷』に「昭和十六年一月病氣再発。逗子佐鶴の石川病院に入院。」とあるのは誤まり。

昭和十六年八月ごろ、神奈川県三浦郡大楠町佐島海岸の西浦海浜療院（通称「石川病院」）に入院した。cf.注4。

\* \* \*

「大正大学授業経過報告」（専門部高等師範科三年一組）  
（第一学期）（総授業時数 十八時間）

教科書ヲ用キズ、スペテ講義ヲ筆記セシメ、之ニ就キテ詳細ニ説明ヲ加フ

マツ國語學史ノ意義、目的ヲ説キ、國語學史ハ畢竟我が國民ノ自國語ニ對スル反省、自覺ノ歴史ナルコトヲ明カニス

次ニ、古代日本人ノ言語意識ヲ論ジ、原始人ガ素朴ナル神秘的言語觀ヨリ出發シテ、次第二言語ソノモノニ對スル客觀的觀察ニ進ミ、外國語トノ接觸ニヨツテ母國語ニ對スル自覺ヲ明カニシタルコトヲ示ス

漢字、漢文ノ輸入セラレタル次第ヲ述ベ、我が國民ガヨクソレヲヲ咀嚼シ日本化シテ自己ノ思想ヲ表現スル手段ヲ作り出シタルノミナラズ、ソノ過程ニ於テ自ラ自國語ノ諸性質ヲ自覺スルニ至レル事實ヲ明カニス

即チ、字音ノ輸入、字訓並ニ倒讀法ノ成立、固有ノ國語、國文ヲ漢字ニヨツテ寫シ出す方法ノ發達等ニツキテ説明ス

萬葉假名ノ發達ニ伴ツテ自國語ノ音節組織ガ次第ニ自覺セラレ整理セラレテ、ツヒニ「あめつち」ノ歌ヲナシ、ツイテ大爲兩歌、「いろは」歌ヲ生ゼル所以ヲ説キ、ソレヲノ國語學史的意義ヲ闡明

ス

片假名、平假名ノ發達セル過程ヲ述ブ、記紀萬葉等ノ萬葉假名ニハ清ト濁トノ區別アルニ、片假名、平假名ニハ何故字形上清濁ノ區別ガ存在セザルカ、ソノ理由ヲ説明シ、我ガ國民ニ於テ自國語ノ清音ト濁音トノ區別ガ自覺セラル、ニ至リシハ、主トシテ漢字音ノ學習ニ起因セルモノナルコトヲ明カニセリ 以上

本學期講ズル所ハ、言ハバ國語學前史ノ一部ニシテ、未ダ狹義ノ國語學成立ノ時期ニ入ルコトヲ得ザリキ、講義者不慣レノ爲メ、説明稍詳細ニ過ギテ、講義ノ進捗意ノ如クナラザリシコトヲ遺憾トス、本學期遅レタル所ハ來學期ニ於テ之ヲ補ハンコトヲ期ス

〈第二學期〉(総授業時数 十二時間)

上代より平安朝時代に至るまでの假名遣の狀態並にその變遷につきて述べ、それより定家の假名遣の定めらるゝに至りし次第を説明す、定家假名遣の本質を論じ、又行阿の假名文字遣を始めとして室町時代及び江戸時代に於ける所謂今假名系統の假名遣書類につきて解説す

假名遣上の方針として自由主義、慣用主義、表音主義、復古主義の四種あることを論ず、假名遣史上の先覺者としての長慶天皇及び成俊につきて述べ、江戸時代に至り契沖出でて今日の所謂歴史的假名遣の基礎の確立せられたる次第を明かにす

古言梯その他江戸時代に於ける古假名系統の假名遣書類につきて解説す、宣長、寛蔭等による字音假名遣の決定につきて述ぶ。契沖以來、眞淵、宣長、秋成等の諸家の所謂古假名の本質に關する見解を紹介論評す

近代諸家の萬葉假名研究を順次紹介して僧春登に及ぶ。この項、なほ來學期に繼續する豫定なり。

〈第三學期〉(総授業時数 一〇時間)

前學期より引續き、萬葉假名の分類に關する學說の歴史を述ぶ。

又、古言の清濁に關する本居宣長、石塚龍麿の研究、古代の特殊假名遣に關する宣長、龍麿等の研究、ア行のエとヤ行のエとの區別に關する奥村榮實の研究、字音尾の鼻音に於ける三内の區別に關する諸家の研究を紹介す。

五十音圖が、最初反切の用のために組み立てられ、後、悉曇家の説によつて合理的に整頓せられ、その列、ついで行の順序が漸次今日の如く定まり行きたる次第を説明す。次に、江戸時代諸家の五十音圖に關する見解を述べ、つひに富士谷成章、本居宣長に至つてオ、ヲの位置が今日の如く確定せらるゝに至りし次第を明かにす。音の相通、省略、添加、また所謂約音、延音等に關する學說の歴史を述ぶ。

てにをのはの觀念の成立並にその名稱の起原につきて述ぶ。手兩波大概抄、姉小路式及びその末裔を中心とする歌學者系統のてにをは研究、中世の連歌家のてにをは觀察等の事實より、進んで、江戸時代中頃に至つて新機運の發動するあり、つひに、富士谷成章、本居宣長の兩人に至つててにをは研究史上未曾有の新展開を示すに至りし事情を明かにす。

なほ、宣長以後のてにをは研究につきて述べ、用言の活用、文典の編纂、語原の研究、辭書の發達等について説明する豫定なりしも、病氣のため最終二回の講義を中止するの已む無きに至り、つひに講義を完結する能はざりしことは、深く遺憾とする所なり。

(昭和五十七年十二月十六日 受理)